

---

# あの事件

スグル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの事件

### 【著者名】

スグル

ZZマーク

N1271F

### 【あらすじ】

知らないといつまでも、知りすぎると、知りすぎると、

(前書き)

『あの事件』は、今でも、彼を苦しめ続ける。

ある日の朝、僕が目を覚ますと、いつもの見慣れた日常の景色がなく、漆黒の風景ばかりが広がっていた。

『ここだ、ここは…？

明らかに、自宅ではない中世ヨーロッパを意識したかのような白い壁に、ガラス細工のモザイクで作られた窓だけがある狭く薄暗い、小さな灯りの部屋に、僕が居る…。

そして、部屋には、顔見知りの居ない10人の老若男女が居た。なんなんだ？と、皆が困惑している。

すると、部屋の片隅にあつたスピーカーから、音が流れた。

『よつこや…、みなさん…。初めまして…』

人の声ではない。

機械で調整された声だ。

皆が、部屋の片隅にあつたスピーカーに首を向けると、スピーカーから、信じられない一言が放たれた。

『いきなりですが…、みなさん…、この場に来たからには、入場料として…、しんでもらいます…』

僕は耳を疑つた。

なんで？なぜ、死ななければいけないんだ…？

嫌だ…。

死にたくない…。

僕は、吐き気に襲われた。

…………

あの信じられない一言が放たれた数分後…。

僕は、落ち着きを取り戻した。だが、まだ胃が痙攣し、足が震えている。

他の10名は、落ち着いている人間と、パニック状態に陥つてゐる人間とで別れていた。

「ふざけんじやあねえ！…」

若い金髪の男が、壁を蹴る。見た目から解るくらいに、短気な男だ。

そして、彼を落ち着かせようと、若い女性と、中年のハゲ頭の男性が、その金髪の男の身体を抑えつけている。

「落ち着きなさいよ…」

女性が、そう叫ぶ。

だが、それでも、金髪が落ち着く気配をない。

すると…、一人、クスクス…と壁の隅っこで笑つてゐる氣味の悪い少年が居た。

こんな状況で、何故、笑つていられるんだ…、と思つた矢先、少年のその笑い声は、金髪の男の怒りを買つてしまつた。

「なにが、おかしいんだ！…てめえ！…」

金髪の男は、少年の元へ駆け寄り、首根っこをわしづかむ。

それを、女性が止めさせようと、金髪の着ていたジャンパーを引つ張る。

すると、少年は口を開いた。

「…れって、さあ…、『あの事件』と、まつたく同じだよね…」

少年が『あの事件』と言つと、皆が沈黙した。

『あの事件』……なんだ、それは……。この様子では、この場に居る皆が知っているようだ。

まるで、トライアゴンでも振り返されたように、金髪の男が叫ぶ。

「ちゅうとー君、『あの事件』を語るのはやめなでー。」

女性が『あの事件』と語った瞬間、急に冷静ではなくなり、少年を責める。

僕は、その女性に、『あの事件』について聞いてみた。

「えっ……、君、『あの事件』を知らないの……」

女性が、鳩が豆鉄砲を食らつたかのような表情を浮かべた。すると、他の人々も…、本当に『あの事件』を知らないのか…。と次々に僕の顔に視線を刺し始めた。

「えー、『あの事件』を知らないなんて、『あの事件』より怖いわ」

と、見下すような一言を、僕に浴びせた。  
いや、だから、なんだ、その『あの事件』って…。  
すると…。

「つむぎー。」

急に、あのハゲ頭の中年が口元を押えて、前屈みに倒れた。吐き氣を催したらしい。

女性が、その中年に駆け寄り、彼を介抱すると、

「まさか、『あの事件』を思い出しちゃ、気持ち悪くなつたのですか！」

と叫び。

吐き氣を催すまでに、『あの事件』ところのは、とつともなく悲惨な事件なのか…。と、僕は『あの事件』の内容は知らないが、その中年の様子を見て、恐怖した。

しばらくして、落ち着いた中年が口を開く。

「すいません、一回酔いなんです…」

どうやら、『あの事件』とは関係ないようだ。  
だから、『あの事件』てなんだ?と思つていたが、誰も教えてくれなかつた。

じぱりべするど、また少年が口を開く。

「なんで、『あの事件』で起きたんだろうね…」

また、『あの事件』について語り始めた。

すると、油を染み込ませた紙に着火した火のようになり、僕以外のみんなが、『あの事件』について噛み付き始めた。

「いいかげんしろよ！『あの事件』を思い出すなー！」

金髪が口火を切ると、女性が、

「『あの事件』は、カロリーメイトがおやつに含まれるか、どうかで、話が拗れたんでしょう…！」

と、その事件の内容に触れるようなことを言った。

どうやら、カロリーメイトが関係あるようだ…。しかし、なんで、カロリーメイトが関係あるんだと、僕は思った。

すると、金髪が、女性のその言葉が気に入らなかつたのか、反論した。

「なに言つてんだ、てめえ！？キムチが、意外とマヨネーズに合うことが事件の始まりだろ！？」

すると、女性が、それに反論。

「あなたこそ、なに言つてるのー？事件を解決した『ファイフティー・セレブ、神崎誠』に対する罵流よ！！」

「ああ…、ファイフティー・セレブ、神崎誠が生み出した、セクシーカットは、確かに芸術的だったが、『お茶漬け少年、村村タモリ』のボーリングで、ピンに向かつてピンを投げる行為が、事件を

解決に導いたんだろ！』

『あの事件』については知らないが、出てくる単語の一ひとつが、なんか凄まじいくらいに、僕の頭を混乱させる。

誰だ…、神崎誠に、村村タモツ…。

すると、またハゲ頭の中年男性が叫んだ。

「うああああ！」

『あの事件』に関することを思い出したのか！？  
みな、そう思つて、彼を見つめると、

「今日、返却のビデオを返すの忘れてた」

だから、なんだ。

性もなんか和解した様子だ。

僕は、黒服にシャーペンの芯を渡しつつ、『あの事件』つてなんだ?と考え続けた…。

「はつーー。」

目を開くと…、僕は自宅のベッドで横たわっていた。いつもの見慣れた日常の景色。間違いなく、僕の部屋。

どうやら、わけのわからない夢を見ていたようだ…。

僕はベッドから起き上がり、学校の制服に着替えた。

そして、家族の居るキッチンへ足を運ぶと、テレビからニュースキャスターの声が聞こえた。

「『あの事件』の続報が入りました!?なんと、『フイフティー・セレブ、神崎誠』のセクシー割り箸割りと、『お茶漬け少年、村村タモツ』のボーリングで、ピンにピンを当てる行為により、迷宮入り寸前だった『あの事件』が解決しました!—」

僕は耳を疑つた。

キッチンで、おばあちゃんが、やつと『あの事件』が解決したんだー、と涙を流しながら、ニュースを見ていた。

それ以来、僕は毎日、ニュースを見るようになったが、僕は、今だに『あの事件』がなんなのか知らない…。

(後書き)

小ネタマイペースで書いた『なんか、血生臭い俺の彼女』の逆に、一つのオチを、長々、引っ張る作品をやつてみたい願望から生まれた今作。ホラー、サスペンス映画や、都市伝説に使われる手法で挑戦。今作はストーリーに重心を置いたので、それに沿うような形でキャラで作りました。オチはともかく、書いて楽でした…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1271f/>

---

あの事件

2010年10月28日08時41分発行